



葉山町ゼロ・ウェイスト推進委員会
活動報告書

まず「ごみ半減」、 町が変わる。



2011年1月



はじめに - 葉山町における、ごみ処理の歴史的な転換

葉山町では、これまで、ごみを燃やし、埋め立てることで処理してきました。そして、巨額の費用をかけて焼却施設を建設・維持し、美しい山野や海に最終処分場をつくることを、ごく当たり前のこととして受け入れてきました。

しかし、去る 2008 年 1 月に当選した新町長は、厳しさを増す町の財政状況の将来を展望し、自然豊かな町の環境を守るために、これまでのごみ処理の方向を、広域化の方針も含めて根本的に転換することが不可避であると表明しました。そして、自然の循環、資源化の技術、地域の人材と知恵を最大限に活かし、ごみを燃やし埋め立てるというムダを極力減らして、できる限り資源としての再利用をめざす、新しい「ゼロ・ウェイスト」(= 無駄ゼロ) の政策を打ち出しました。

葉山町ゼロ・ウェイスト推進委員会は、2009 年 5 月に、このような新しいごみ行政推進の一翼を担うために設置され、「焼却ごみと埋立てごみの半減を実現するための政策課題と最適な導入施策」について諮問を受けました。

委員会はそれ以後数回の会合を開き、諮問内容について議論を重ねてきました。この間、葉山町では、町民と行政あるいは町民同士が協働し、地域の底力を発揮して、全町を挙げて新しいゴミ削減に取り組み、ひいてはそのエネルギーが新しいまちづくりにつながるようなモデル実験の試みを開始しました。当委員会は、その内容や進め方についても、さまざまな提案を行い、2010 年 3 月には「中間答申」として、実験的試みの更なる発展を願った具体策を提言しました。

そうして実施されたこれまでの新しい取り組みは、多くの町民のご協力によって、予想を上回る短期間のうちに、貴重な成果を収めることができました。

このたび、これらの実験活動の調査結果もまとめ、関係された町民の方々からも、多くのご意見ご提案が寄せられたことを踏まえ、最終報告を提出するに至りました。

私たちは、「ごみ半減」が、少しでも早く達成されることを願って、取り組み方を考え、具体策を提案したつもりです。端的に言えば「短期決戦」をめざしています。

葉山町の「ゼロ・ウェイスト」が成功するためには、できるだけ早い時期に、多くの町民の方々が目に見える成果を実感できることが、きわめて重要であると考えます。

この報告書が、多くの町民のみなさまとの意見交換のきっかけとなるとともに、「葉山町におけるごみ処理の歴史的な転換」の意義について、みなさま方の一層のご理解を得るための一助となれば幸いです。

2011 年 1 月

葉山町ゼロ・ウェイスト推進委員会

● 目 次 ●

| | |
|-----------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 葉山町のゼロ・ウェイスト | 3 |
| これまでの取り組みの意義 | |
| 1 ごみ削減の重点課題 | 4 |
| 2 社会実験 - 先行的試行から全面展開へ | 5 |
| (1) 手動式生ごみ処理器モニター事業のポイント | 5 |
| (2) 分別体験モニター事業のポイント | 6 |
| (3) モデル地区事業のポイント | 6 |
| 3 手作り広報紙 - 町民によるごみ削減広報活動 | 8 |
| 4 半減袋デザインワークショップ | 8 |
| 提案 - ごみ半減をめざす葉山方式 | 10 |
| 1 葉山ならではの取り組み方の提案 | 10 |
| (1) 段階的な目標設定 - 葉山の「半減」方式 | 10 |
| (2) 葉山スタイル - ごみ削減を楽しく、おしゃれに | 11 |
| (3) インセンティブ - 努力が報われる仕組み | 11 |
| 2 半減に向けた具体的取り組みの提案 | 11 |
| (1) ごみ半減袋の継続・拡大 | 11 |
| (2) 資源小屋の配備 | 12 |
| (3) 事業系ごみへの対応 | 12 |
| (4) 行政の推進体制の整備 | 13 |
| おわりに | 14 |

資料編

| | |
|---------------------|----|
| ゼロ・ウェイスト推進委員会 名簿 | 15 |
| ゼロ・ウェイスト推進委員会 活動経過 | 15 |
| 半減袋デザインワークショップ実施報告書 | 16 |



葉山町のゼロ・ウェイスト

「ゼロ・ウェイスト」は、これから葉山町のごみ行政推進の指針として、あるいは町民のごみ削減活動の依りどころとなる基本的な考え方です。

葉山町では、すでに『葉山町ゼロ・ウェイストへの挑戦』(2008年6月)、『葉山町ゼロ・ウェイスト計画施策骨子素案』(同年11月)を発行して、「ゼロ・ウェイスト」について述べています。また、広報や各種の会合などにおいても、繰り返し説明をしています。

当委員会としては、「ゼロ・ウェイスト」を、確立した原理原則として固定的に受け止めるよりも、ごみの削減という、町民と行政の具体的な実践活動を通して、次第に体感され、共有されていくべきであると考えています。

すなわち、実践を積み重ねる中で、葉山町ならではの「ゼロ・ウェイスト」の基本的考え方が町民の間に共有され、行政施策や具体的な活動の指針となっていくことを期待しています。

このような視点に立って、当委員会は、今後の取り組みを提案するに当たり、その前提となる「葉山町のゼロ・ウェイスト」の考え方を、以下のように要約しました。

●————— 葉山町のゼロ・ウェイスト —————●

1. ごみを減らす

資源になるものを分けて回収し、リサイクルすることで、焼却・埋め立てごみを減らします。

また、使える物はできるだけ繰り返し使い、捨ててしまう物や食べ物を少なくします。

ごみを減らす、あるいはごみを出さない生活習慣を身につけていきます。

2. 無駄をなくす

目の前のごみをただなくすのではなく、長期的、総合的に、資源を無駄にしないことを考えた処理方法を選択します。

また、便利な技術を用いた処理施設を安易に導入するのではなく、必要な施設を見極め、確保していきます。

3. 実践から発想する

実践を重視し、現場の声を大切に、柔軟な姿勢で絶えず改良に努めます。

新しい考え方や手法を積極的に取り入れるために、社会実験的な取り組みにも果敢に挑戦します。

4. 地域の力をつける

町民、事業者、行政が、それぞれに適した役割を果たしながら、協力し合うなかで、地域の人材と知恵を結集して、目標の達成をめざします。

これからのまちづくりの基本となる「地域の力」を強化し、活力あるまちをめざし

ます。

5 . 努力が報われる

良い取り組みをした個人や地域、団体や事業者が報われる仕組みを設け、ごみ削減活動への参加・協力を促すとともに、持続性のある活動をめざします。



これまでの取り組みの意義

すでに葉山町では、ごみ削減に関する実験的な取り組みが始まっています。

ここでは、これまでの葉山町の取り組みが、どのような考え方に基づいてなされてきたのか、そしてどのような特色を持ち、どのような成果を収めつつあるのか、そのポイントを確認しておきたいと思います。

1 ごみ削減の重点課題 - まず「生ごみ」削減に取り組む

葉山町は、第1期のごみ削減の目標として、「ごみ半減」を掲げています。これは、きわめて高い目標には違いありませんが、決して達成不可能ではありません。

町民と行政が知恵と力を出し合って、「ごみ半減」が達成できることが実証できれば、葉山町のごみ削減は、大きく前進します。

「ごみ半減」を、できるだけ早く、効率的に達成するためには、まんべんなく、あれもこれもすべてのごみを均等に半減するというのではなく、半減の主要な対象を絞り込み、そこに知恵と力を集中していくことが有効であると考えられます。すなわち、さまざまなごみの中から、当面、何の削減に重点を置くかを戦略的、現実的に見極めていくことが非常に重要になります。

葉山町では、検討を重ねた結果、多くの町民にとって日常的に最も身近であり、自らの手で削減が可能な、しかしそれだけにまた厄介なごみである「生ごみ」を取り上げ、その削減に先行的、重点的に取り組むことになりました。

排出ごみの約半分を占め、可燃ごみの代表格の「生ごみ」が大幅に削減できれば、その後のごみ削減の取り組みに大きな弾みがつきます。また、町民のごみ削減に対する関心や意識も大きく変わることが期待できます。

葉山町では、生ごみが発生した場所で、発生後なるべく早いうちに、処理する自家処理を推奨し、そのための機械や容器の普及をはかっています。

手動式生ごみ処理機「くるくる」のモニター事業や、役場窓口販売によって自家処理に取り組む個人を増やす「点」での展開と、モデル地区の取り組みで普及させていく「面」の展開を行っています。

また、家庭以外に、役場、保育園、学校などの公共施設においても、自家処理の取り組みが始まっています。

2 社会実験 - 先行的試行から全面展開へ

生ごみ削減のような新しい試みは、実際に取り組んでみないと、わからない問題がたくさんあります。練りに練った精緻な計画であっても、それを実施に移す段階になれば、予想されなかった問題が発生します。とくに具体的な取り組み方は、当事者の意識や意欲に大きく依存しているので、実際に活動してみたらうえて、問題点をひとつひとつ解決していくほかありません。

その意味では、予め机上で計画を立案し、それに基づいて予算を措置し、実施に移すという通常の行政の発想や仕組みには馴染みにくい面があります。そこで、葉山町では、平成 21 年度から、モデル事業、モデル地区の設定という「社会実験」から始めるという方法で、これに取り組んできました。

具体的には、手動式生ごみ処理器モニター事業、分別体験モニター事業、モデル地区事業、の3つです。

それぞれの「社会実験」の詳しい内容と結果は、他の資料に譲り、ここでは、これからの取り組み方を考える上で、着目すべきいくつかのポイントを押さえておきたいと思えます。

(1) 手動式生ごみ処理器モニター事業のポイント

この事業の主な狙いは、電気を使わない生ごみ処理機をモニターに提供し、実際に使用したうえて、その効果や使い勝手などをチェックしてもらうことでした。

平成 21 年度には手動式生ごみ処理機「くるくる」、平成 22 年度には「くるくる」のモニター結果を反映して試作した「まぜまぜ」、また葉山町民考案の「ベランダ de キエーロ」を町内モニターに使用してもらいました。

実験の結果、多くのモニターが継続したいという意向を示し、普及可能性が見えてきた他、継続にあたっては適切な情報とサポートが重要であることがわかりました。

確認しておくべきことは、葉山町においては、手動式を中心に普及をはかるという方針で臨んでおり、電動式はあくまで補完的であるという点です。

また、当事者の意見や提案に沿って、器具の改良や開発を積極的に進めていくことや、町民の考案した方式を採用し、実験的に普及していくことも葉山らしい取り組み方といえます。



くるくる



まぜまぜ



ベランダ de キエーロ

(2) 分別体験モニター事業のポイント

この事業は、今後、ごみを半減するための手法を検討するためのものです。そのため、応募した約100世帯を対象に、世帯員数に応じた大、中、小3種類のごみ袋を使用してもらい、一定の大きさの指定袋に排出ごみを入れることができるかどうかの実験をしました。また、毎日の排出ごみの計量もお願いしました。

その結果、指定した大きさの袋にごみを収めることが可能であることが実証されました。また、燃えないゴミについては、約9割の世帯で月1回の収集で十分であるという結果も得られました。

特記すべきことは、こうした実験への参加を通して、ごみ減量に対する関心が高まるとともに、排出量を減らすために日々の工夫の積み重ねが始まり、実際に取り組んだ当事者にとって、大きな啓発効果が生まれたことです。



実験で使用された「半減袋」

(3) モデル地区事業のポイント

本事業は、町内の5地区をモデル地区として、生ごみ自家処理の徹底と新しい分別収集方法の導入実験を行ったものです。

生ごみ処理の自家処理については、約5種類の器種を用意し、それぞれの効果や使いやすさを実際の使用によって検証しました。

とくに注目すべきことは、モデル地区内の一住民が考案し、命名した極めてシンプルな器具が登場し、相当数の世帯でそれを実験的に使用したことです。この住民手作りともいえる器具(愛称「キエーロ」)が、改良を加えながら、広く町内に普及していくことが期待されます。



キエーロ

新しい分別収集方法の導入実験では、一色台地区と牛ヶ谷戸地区で戸別収集と資源物のステーションまたは拠点回収を開始し、短期間で燃やすごみが5割から7割減量す

るという驚異的な成果が現れました。

いずれの地区においても、町内会や自治会内の組織が地元におけるリーダーシップを発揮し、行政と一緒に導入をすすめてきているところが大きな特徴です。一色台地区では、住民手づくりの「資源小屋」が生まれ、牛ヶ谷戸地区では町内会による説明会が何度も開催され、400近い世帯をまとめるに至りました。これらの過程において、地区内の会話、交流、つながりが生まれてきていることも注目すべきポイントです。

また、一部の資源物については、その回収量に応じて町内会・自治会へ奨励金が支払われており、良い取り組みが報われる仕組みが実現されています。

この事業のように、まずモデル地区で先行的に試行し、その経験や結果を踏まえて、新たな地区に広げていくという進め方こそ、葉山町らしい、「ごみ半減」の取り組み方といえると思います。



一色台の資源小屋



牛ヶ谷戸の資源ステーション

3 手作り広報紙 - 町民によるごみ削減広報活動

ごみ削減の主役は町民であり、施策の推進には町民の視点が不可欠です。

2009年5月から募集を開始したゼロ・ウェイストボランティアスタッフも、分別パネルの展示や、不要傘から作った傘袋を役場に設置し、使い捨ての傘袋を撤廃するなど、様々な取り組みを展開しています。

なかでもごみ減量を呼びかける『ごみっぺらし通信』は、「わかりにくい」「面白くない」という意見が多い行政の広報を補う形で、イラスト入りの楽しい内容が好評を得ています。

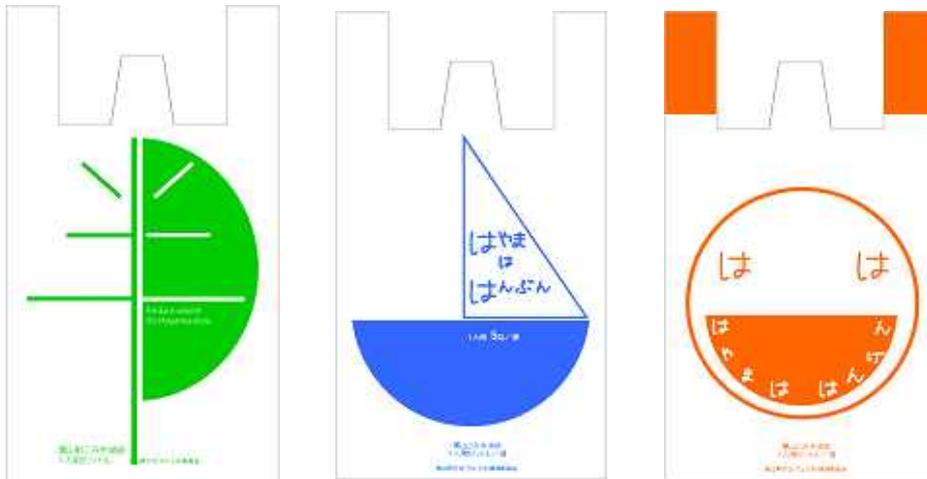
行政から町民へ伝える、のではなく、町民から町民に伝える、という新しい広報スタイルへの挑戦が始まっています。



『ごみっぺらし通信』第5号

4 半減袋デザインワークショップ

当委員会では、「ごみ半減」のツールである「半減袋」に着目し、そのデザインについても議論を重ねてきました。



委員会で検討された葉山らしい袋のデザイン（いずれも百武委員デザイン）

そして、「中間答申」で提案した「ごみ削減を楽しく、おしゃれに」の実践として、「半減袋」のデザインワークショップを町と共催で実施しました。このワークショップは、半減袋のデザインを通して、葉山のごみの現状、ごみ半減の必要性などについて理

解を深めることを意図したものです。

ワークショップには、26人が参加し、「葉山らしさ」「ごみ減量への意識づけ」などについて熱心な議論が繰り広げられました。（詳細は資料編3を参照）

これらの議論にもとづいたデザインが指定袋として町民に利用され、ごみ半減へ前進する大きな原動力となることが期待されます。



デザインを考える参加者



アイデアを発表し合う様子

1 葉山ならではの取り組み方の提案

先に見たように、これまでの葉山町の「ごみ半減」の取り組みには、際立った特色が見られます。その特色に着目し、創造性に富んだ葉山ならではの「ごみ半減」方式が編み出されることを期待して、以下にいくつかの提案をしたいと思います。

(1) 段階的な目標設定 - 葉山の「半減」方式

ゼロ・ウェイストは、将来的にごみを限りなくゼロに近づけていくことですが、葉山町の実践上の目標としては、まず現在目の前にあるごみを「半減」という段階的な目標を設定します。数字でいえば50%削減ということです。

そして、その第1段階の目標が達成された時点で、次の「半減」をめざします。結果的には、当初の75%削減ということになります。さらに次の「半減」の結果は、約88%ということになります。

このように、第1段階の半減目標の設定と達成、第2段階の半減目標と達成という形で、段階的に取り組んでいくことが葉山方式といえます。

なぜ、このように「半減」方式で段階的に目標設定をして取り組むのでしょうか。

なぜ、予め固定した最終目標値を設定し、それに向けて機械的に年次を区切って、それぞれの時点の目標値を達成していくやり方ではなく、それとは基本的に異なる発想で取り組む必要があるのでしょうか。

それは、ごみ削減の取り組みが、その時代の技術革新の状況、環境やごみに対する国民世論、それに基づく国の政策などに大きく左右されるからです。そして何よりも削減活動に取り組んできた町民自身の体験から編み出される創意工夫、形作られた互いの連携のきずなや仕組み、さらには関係者の達成感とそれがもたらす自信や意欲に大きく依存しているからです。

言い換えれば、段階ごとに目標達成のための手法や重視すべき施策が変わる可能性があるといえます。

「ごみ半減」を自らの意欲と創意工夫で達成した町民は、万が一にも制度が変わり、行政の姿勢に変化があったとしても、これまでの実践に裏打ちされた経験に基づいて、次の段階の「ごみ半減」に自信を持って挑戦していくことができます。

このような、ごみをめぐる特殊な実態と長期的な展望を考慮すると、葉山ならではの「半減」方式による段階的な目標設定は、きわめて現実的で、理にかなった方式であり、したがってその効果が十分に期待できる方式であると考えられます。

(2) 葉山スタイル - ごみ削減を楽しく、おしゃれに

「穏やかな海」「静かな佇まい」「くつろぎの時間」のある葉山は、移住者が絶えない人気の町です。人々が心惹かれるライフスタイルに、ごみの減量の活動もその一部として組み込む工夫をしていきたいと思えます。

ごみ半減のロゴ、ごみ半減袋や資源小屋のデザインにも、葉山ならではの楽しい、おしゃれ感覚がにじみ出てくることでしょう。

ごみ削減が、住みたいまち、訪ねたい町、美しい葉山をつくることにつながっていくことを自覚して、取り組まれることを期待しています。

(3) インセンティブ - 努力が報われる仕組み

インセンティブとは、活動の動機づけや奨励策を意味します。これまでのところ、葉山町では、町民が積極的にごみ削減に取り組みたくなるような具体的な動機づけや、特別の奨励策はありませんでした。

しかし、今後、第1段階の「ごみ半減」を実現していくためには、多くの町民が意欲的に取り組むための積極的な奨励策が必要になります。確かに一生懸命に努力した人は、自らの使命感や達成感によって十分に満足する場合もあるでしょうが、努力した人も努力しない人も全く同じ扱いでは、やはり意欲が高まりにくいことも十分に予想されます。

そこで、一定の努力や工夫に対しては、それが、ある程度、報われる仕組みを作る必要があると思えます。

例えば、新しい分別収集のモデル地区では、一部の資源物はその回収量に応じて奨励金として地元に戻元されており、きれいな資源物が集まれば、それが報われるという仕組みが好評を得て、住民の協力へとつながっています。

このように、葉山町にふさわしい適切なインセンティブを編み出すことは、いずれの減量施策においても今後の重要課題です。

2 半減に向けた具体的取り組みの提案

これまでの実験活動の結果を踏まえて、これから何に取り組むべきか、当面の具体的取り組みについて、以下に提案します。

(1) ごみ半減袋の継続・拡大

ごみ半減のための「半減袋」のモニター事業は、予想以上の成果をもたらしました。ほとんどの実験参加者が排出ごみを指定袋の容量内に収めることができたことは、指定袋の効用が非常に大きいことを示しています。

少しでも多くの町民が指定袋を使用する経験も持つことが将来のごみ半減に対する地ならしになると考えられるので、この実験は一過性でなく、新たなインセンティブ政策と併せて継続して実施することが重要です。

新しい分別収集のモデル地区で実証された収集方式に加え、この「半減袋」を指定袋として導入することで、ごみ半減の意識啓発、さらにはごみをなるべく出さない生活習慣の普及をはかることを提案します。

また、葉山町の生活空間の中に、「葉山ごみ半減袋」が普及定着していく光景を想定して、そのデザインについても配慮し、デザインワークショップの成果を活用することを期待します。

(2) 資源小屋の配備

ごみ半減のためには、有用なものをごみにしないことも重要です。そこで葉山町では、生ごみ処理とともに、資源回収についても積極的に取り組んできました。

各家庭や地域での資源回収をさらに促進する仕掛けとして、各人が資源物を持ち込み、集積できる簡単な小屋・倉庫を、各地域内に設置することが有効と考えられます。

すでに、一色台モデル地区では、この方式が開始され、「いつでも持ち込めること」「分別がしやすい」ことなどが好評を得ています。

ただしここで注意すべきは、常設の集積所は、一般的に不法投棄やルール違反ごみの置き去りが多発しやすいことが懸念されるなか、地元住民が清掃・管理を行うことで、清潔・整然とした状態を保っているということです。

こうした住民主導のもとで、希望する町内会・自治会については、機能やデザイン面の改良を重ねた「資源小屋」を配置していくべきであると思います。

高齢者や障害者など、自ら「資源小屋」に運び込むのが困難な人に対しては、近隣の住民による支援の検討が必要となります。

また、各地区に設置される資源小屋と並行して、その全町版ともいえる「葉山町リサイクル・センター」(仮称)を町の中心、例えば役場庁舎の周辺などに設置することを早急に検討することを提案します。

(3) 事業系ごみへの対応

家庭系ごみについての半減施策が進められるなかでは、事業系ごみについても抜本的な減量施策をとることが、住民の理解を得るうえでも不可欠であると考えられます。

事業系ごみも、家庭系ごみと同様に、生ごみ削減に取り組むことが順当と考えられますが、事業者の規模や形態は多種多様であり、それに対応した適切な施策を慎重に検討する必要があります。

多様な事業者が存在することを考慮すると、まず生ゴミを大量に排出する事業者を中

心に、新しい仕組みをつくるのが有効と考えられます。例えば、行政が調整役となって、こうした事業者が互いに連携し、共同で生ごみ処理の循環ルートを形成する試みなどを検討する必要があります。

生ごみ以外についても、スーパーなどのレジ袋の削減や廃止、容器のリサイクル機能の充実など、さまざまな試みが考えられます。東京都町田市では、事業者・市民・行政の三者協働のもとで、市内のスーパーにおいてレジ袋を廃止する「レジ袋ゼロ実験」が行われ、マイバッグ持参率が 9 割を超えるという取り組みが行われています。このように、事業者が取り組みやすいように、情報交換、連携をすすめるサポートを行政に期待します。

また、現在町は、事業者のごみを 10 キロ 100 円という実際の処理費の半分にも満たない料金で受け入れています。これは県内の他市町村に比べ非常に安価であり、事業者の自己処理責任という点では十分とはいえないものがあります。町で予定されている燃やすごみの指定袋の一部無料制が導入されればなおさら、事業者も応分の費用負担をすることが妥当であると考えられます。このような料金の改定はまた、ごみを減らすインセンティブにもなり、減量につながることでしょう。

このような方向性のもとで、事業者に対するアンケートなどにより現状を把握したうえで、施策を設計することが必要です。

さらに、私たちが食料品や日用品を購入するところから、ごみになってしまうものを減らすためにも、事業者といっしょになって取り組むことに大きな可能性があります。ごみの減量という視点にたつて、商品の物流を変えていく実験の実施など、葉山らしい試みを期待します。

(4) 行政の推進体制の整備

葉山町は、ごみを燃やさない、埋め立てないという画期的な方針に沿ってごみ行政を進めることに踏み切りました。そして、多くの町民を巻き込んだ「社会実験」も開始しました。

しかし、行政の推進体制としては、必ずしも十分に対応しているとはいえません。モデル事業やモデル事業の「社会実験」がそれなりの成功を収めたのは、それを支えた担当職員の非常な苦労があったからと言って過言ではありません。

このような個々の職員の努力には限界があり、今後、さらに「実験」を拡大し、本格的な「ゼロ・ウェイスト」政策を推進していくには、それら一連の活動を維持した、さらに充実発展させるための体制整備が不可欠であると考えます。

そもそも画期的ともいえるごみ行政の大きな転換は、現町長の選挙公約でもあり、その後の町政の重要事項となってきました。また、町としては、当面「ごみ半減」というきわめて高い目標も掲げています。

このような重要施策は、行政の一部局の担当者だけで推進できる性格のものではなく、全庁的な視野に立って、行政全体の意識改革をはかりつつ、「ゼロ・ウェイスト」推進

部局の発足をはじめ「ごみ半減」推進の庁内体制の整備に速やかに着手する必要があると思います。

今後は、この新体制の下で、公約である「ごみ半減」に本格的に取り組むことを期待したいと思います。

おわりに - ごみ半減へ、前進あるのみ

葉山町は、「ごみ半減」という困難ながらも、将来に大きな希望を与える画期的な挑戦を開始し、短期間にもかかわらず、一定の成果を収めました。

これは担当された行政職員の努力はもとより、実験に実際に参加された町民の方々の熱心な実践のたまものであります。

全町的に見れば、まだごく一部の動きではありますが、この経験はきわめて示唆に富む、貴重なものといえます。

行政は、その成果を活かして、間を置くことなく、次なる実践に取り掛かることが、このたびの実験に積極的に参加された町民の方々の努力に報いることとなります。

当委員会の議論の中では、「実験に参加した町民は、行政がより果敢にごみ半減に取り組むことを切に望む」「町民が多大の努力を傾けているのに、行政はなぜ、さらなる取り組みに大胆に踏み出さないのか」などなど、行政に対する町民委員の叱咤激励の発言がありました。

実験に協力された多くの町民の期待に応えるためにも、先に挙げた提案が遅滞なく実施に移されることを希望します。また、なんらかの事情で実施できない場合には、その理由を町民の皆さんに対して説明していただきたいと思います。

今後「ごみ半減」をめざす葉山町独自の「ゼロ・ウェイスト」政策がさらに前進するなかで、「葉山町ゼロ・ウェイスト宣言」を行い、全国各地の同様の試みと呼応しつつ、町民の意欲と知恵を結集させ、行政の新しい展開がはかられることを願って、この最終報告を締めくくりたいと思います。

資料編

● ゼロ・ウェイスト推進委員会 名簿

| | | |
|------|--------|-----------------------|
| 委員長 | 渋谷 謙三 | 学識経験者等（環境自治システム研究所代表） |
| 副委員長 | 窪田 一成 | 町民公募委員 |
| 委員 | 森戸 哲 | 学識経験者等（地域総合研究所代表） |
| | 百武 ひろ子 | 学識経験者等（プロセスデザイン研究所代表） |
| | 時津 彩子 | 町民公募委員 |
| | 松本 恵里子 | 町民公募委員 |
| | 新倉 洋樹 | 事業者代表（株式会社スズキヤ 店舗運営部） |

● ゼロ・ウェイスト推進委員会 活動経過

委員会開催記録

- 第1回（H21/5/12） 葉山町ゼロ・ウェイスト計画の経緯と方針 等
- 第2回（H21/8/11） 各種モデル事業のねらいと半減計画 等
- 第3回（H21/12/25） ゼロ・ウェイスト基本方針の策定 等
- 第4回（H22/3/29） 中間答申について 等
- 第5回（H22/4/27） 最終答申について 等
- 第6回（H22/9/3） 事業活動に伴うごみの減量施策について 等
- 第7回（H22/10/29） ごみ袋デザインワークショップについて 等
- 第8回（H22/11/27） 町民交流集会の提案 等

その他の活動記録

- 一色台地区資源小屋の製作協力（H22/3月）
- 環境フェスタ（H22/6/6） 中間答申の内容をパネル展示
- 半減袋デザインワークショップ（H22/11/27）

半減袋デザインワークショップ
実施報告書



2010.11.27
at 葉山町教育総合センター

1 目的

本ワークショップは、葉山町が燃やすごみの指定袋として導入を検討している「半減袋」を、使用者とのコミュニケーションの手段として捉え、そのデザインを町民の視点から考える機会として実施しました。デザインのアイデアを抽出するだけでなく、デザインを考える過程を通して、葉山のごみの現状、ごみ半減の必要性、ごみ袋に求められる要素について理解を深めることを目的としています。

2 概要

主催：ゼロ・ウェイスト推進委員会 葉山町

日時：平成22年11月27日(土)14時~17時

場所：葉山町教育総合センター会議室1

ファシリテーター：百武ひろ子氏

参加人数：26人(うちゼロ・ウェイスト推進委員会委員5人)

事務局：環境課職員4人

3 プログラム

はじめに、「半減袋」の趣旨を環境課から、またワークショップの方法、スケジュールについてファシリテーターから説明し、その後作業に入りました。

作業1 こんなごみ袋あったらいいな

「こんなごみ袋あったらいいな」という「夢」を、記入シートに書いて(5分)その発表を兼ねて参加者の自己紹介を行いました。参加者からはさまざまなアイデアが発表されました。

- 図柄

目盛り(分量がわかるようにする)/メタボのイラスト/かわいらしさ/夢がある絵/半分を強調したデザイン/おしゃれ/かわいい生き物/イラスト例(木、魚、ひまわり、子ども、アンパンマン)

- 情報

へらすためのコツ/スローガン(お説教くさくなく)

- 袋の色

一色だと安い/カラフルなほうがいい/葉山は青!/葉山は緑!/収集する人に目立つように/透明で中身が見えるように

● その他

底敷があったほうが安定してよい / 持ち手があったほうが良い / ない方がよい



発表の様子



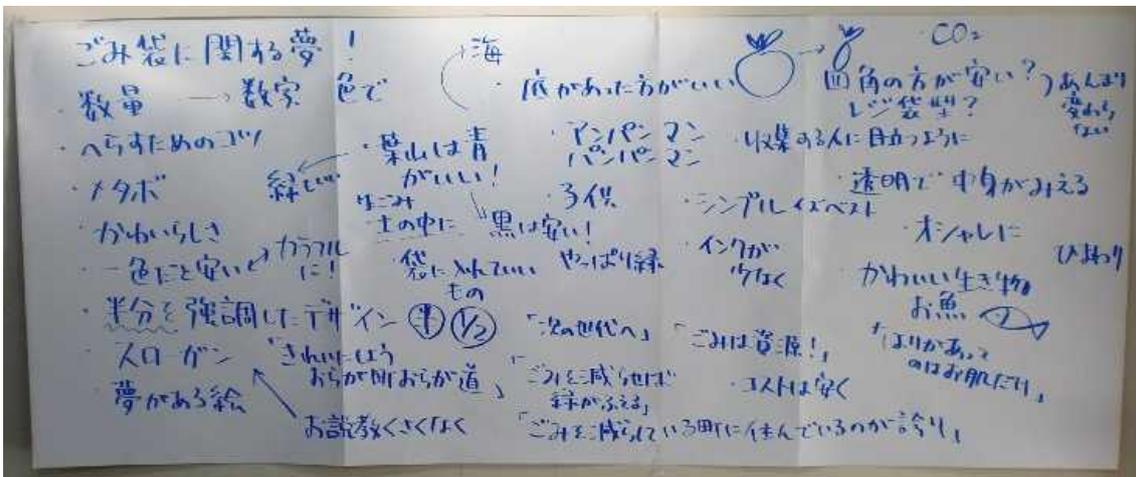
参加者の記入シート



参加者の記入シート



参加者の記入シート



発表されたさまざまなアイデア

ごみ袋ってどんなもの？

ファシリテーターが、ごみ袋の歴史、他自治体の指定袋デザインの傾向などについて解説をしました。



スライドを使った説明

作業2 グループワーク

5グループに分かれ、各グループで大事にしたいデザインの考えを話し合いました。最後には、イラストまたは文字でグループの考えを発表しました。

(グループ1)

文字が少なくシンプルに
色もすっきり一色で
透明は行き過ぎなので半透明に
おもしろいデザイン、おしゃれに
捨てたくない袋
3サイズを「色」「パターン」で分ける



グループ1

(グループ2)

ごみ出しが楽しくなることが重要
シンプルで美しく、コストがかからないもの



グループ2

(グループ3)

戸別収集では、容器に入れて出すので、出す人が楽しくなることが重要

春、秋の2バージョン作ってはどうか
レジ袋を利用しないのはエコではないのでは??

袋の形は持つところがあった方がよい
シンプルで字の少ないデザイン

葉山らしい色を決める

入れた量がわかるほうが良い

袋を余らせたくないような動機付けが必要



グループ3

(グループ4)

メジャーで分量がわかるようにする
木のイラスト(量が増えるほど木が小さくなる)

両サイドにのみイラストを配置



グループ4

(グループ5)

戸別収集なので、ごみ袋はごみを出す人のためと位置づける

デザイン重視で情報はミニマムに

「かわいくてカラフルなデザイン」と「分別方法、意識、スローガン」が両立するのが夢の袋!

葉山らしさ・・・富士山、葉っぱ、鳥居

むしろポリバケツのデザインが重要・・・!?



グループ5

作業3 全体ディスカッション

気に入ったデザイン、コンセプトに投票し、全体のディスカッションを行いました。



投票の様子

<方向性についての主な決定事項>

- 色
半透明 / 「葉山らしい色」として「青」「緑」が多くの支持を得た
- 持ち手
持ち手はあったほうが良い
- 余剰袋
余らせたくなる動機付けを町で検討する
- デザイン
グループ1の「水玉」、グループ4の「両サイドに配置」が多くの支持を得た
- アイコン
ヨット、木 + 1 (富士山、鳥居、葉っぱ・・・?)
- パターン
サイズ毎にデザインを変えるという案が多くの支持を得た
(サイズ毎は図柄が同じでも版が変わるため、図柄を変えてもコストは変わらない)

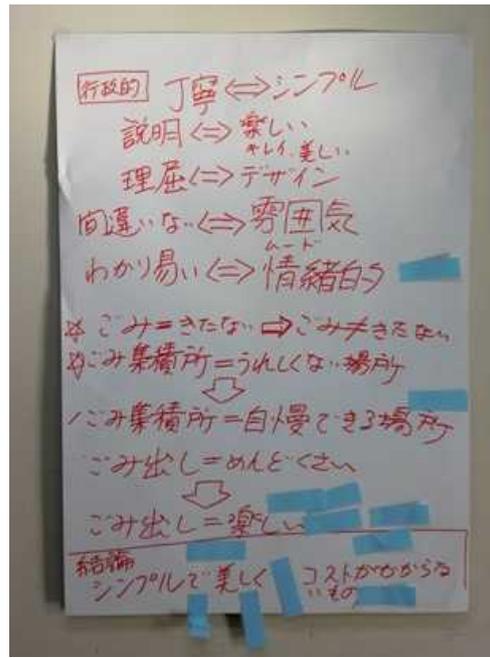
<その他の議論>

- シーズン毎にデザインを変える
版代(1つ4万円程度)や、引き替えに伴う事務量が増える
- 戸別収集で竹のごみ箱を使用すれば景観的にも良いのでは

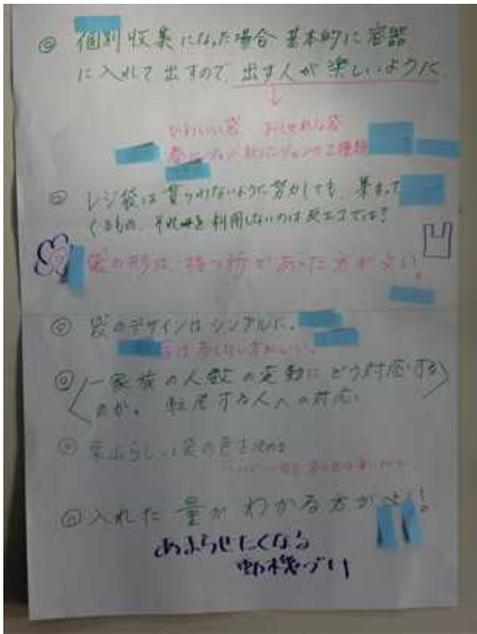
(各グループの発表資料)



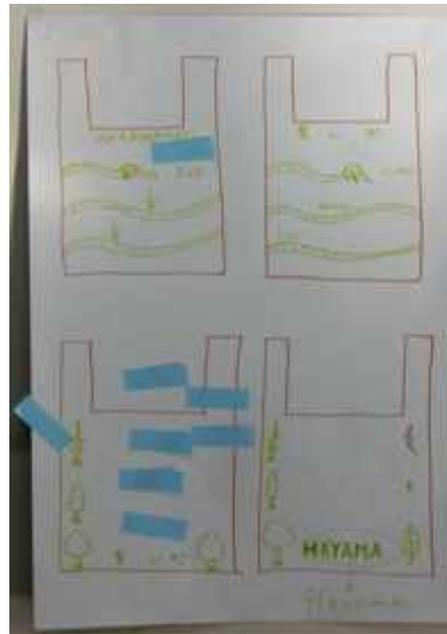
グループ1



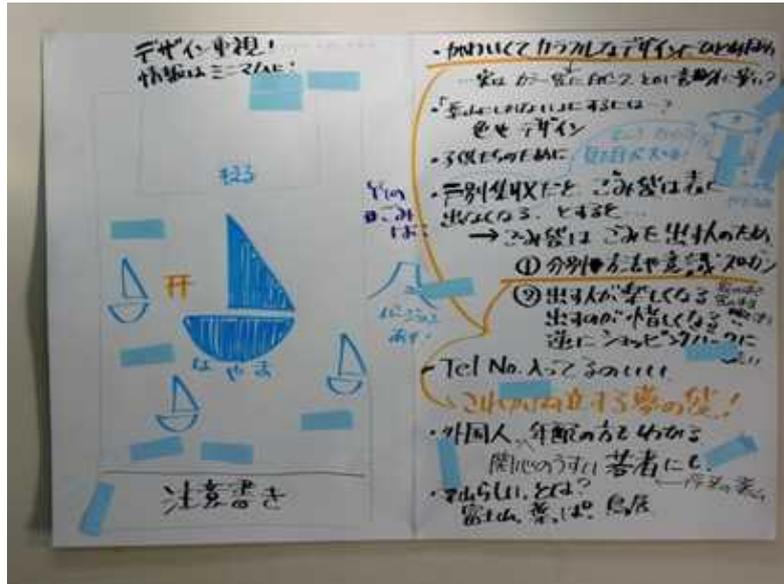
グループ2



グループ3



グループ4



グループ5

おわりに

ワークショップ当日は、これまでの行政によるごみ関連の行事には参加したことがないという新しい顔もたくさん見られ、「デザイン」という新しいキーワードによって関心を持つ町民の層が広がったことを実感しました。

議論が深まっていくなかで、ごみ袋というツールを通して、「どうすれば使用者に減量のメッセージを伝えられるだろうか」ということに多くの参加者が思いを巡らせ、さらに「葉山らしさとはなんだろう?」というまちづくりのコンセプトにつながるより大きな問いへの発展がみられました。また、「めんどろ」「強制」といった負のイメージが伴いがちであるごみ問題をテーマとした会であるにも関わらず、会場には明るい笑い声が響き、とても前向きな雰囲気最後まで実施することができました。これらのことから、ワークショップの目的は十分に果たされたと言えるでしょう。

当日出されたアイデアは、専門家によって具体的なデザインに表されることとなっています。この袋が、近いうちに葉山町で指定袋として使用され、ワークショップ参加者の思いが使用者に届くことによって、ごみの減量がさらに進むことを期待します。

ゼロ・ウェイスト推進委員会
葉山町

この活動報告書を、葉山町の、そして日本の、
ごみ問題の解決とまちづくりにご尽力された、
故・渋谷謙三委員長に捧げます。